

国際委員会 だより 第66回

Message from International committee

建設コンサルタント海外奮闘記 ～若手技術者が挑む現場の「想定外」：同世代と語る海外インフラ展開のリアル～

国際委員会 観音寺 里佳 | KANNONJI Rika

■ 本コラムに登場する若手メンバー

- ・Aさん（入社9年目）：コロンビアでのスマートモビリティ調査研究や国土交通省発注のインフラ調査業務を担当。
- ・Bさん（入社5年目）：インドネシアにて、日本の下水管機材の海外展開を支援する事業を担当。
- ・Cさん（入社4年目）：アフリカのジブチで道路橋梁建設プロジェクトにて現場監督（施工監理）を担当。
- ・Dさん（入社3年目）：コートジボワールでの家庭ごみ処分に関する計画立案プロジェクトを担当。
- ・筆者（入社5年目）：アセアン地域での道路整備調査や専門家会議の運営支援等を担当。

はじめに

道路や交通など国際的なインフラ整備の最前線では、いかに周到に思っている、予想を超えてくる「想定外」の事態が日常茶飯事です。言語や文化、商習慣、途上国特有のインフラ事情や気候条件などにより、日本の「当たり前」の常識は容易に覆されます。

そのようなカオスとも言える現場で、若手技術者たちがどのように壁を乗り越えているのか。今回は、世界各地のインフラプロジェクトで奮闘する八千代エンジニアリング株式会社の20～30歳代の仲間たち4名にヒアリングを行い、日々の苦労や工夫を集めてみました。見えてきたのは、若手ならではの柔軟な発想と、泥臭い「サバイバル術」でした。

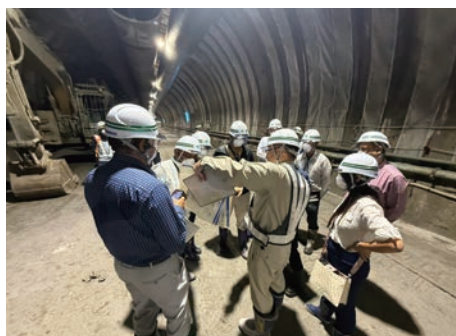


写真1 トネル建設現場での現地調査の様子



写真2 研修・ワークショップにおける熱心な意見交換の様子

日本の常識を手放し、アプローチを柔軟に変える

重要なのは、国内の常識や従来の手法に固執せず、柔軟にアプローチを変える姿勢です。南米コロンビアでのスマートモビリティ調査に参画したAさんは、現地で通訳を介した会議で意図が伝わらず、時間が超過し肝心な質問ができなかったという苦い経験をしました。また、別の調査では調査の具体的な手順や要件を定めた書類の一つである「仕様書」の記載が曖昧なために受注前に想定していなかった作業が発生し、人件費が予算を大幅にオーバーしそうになるトラブルにも直面しました。

Aさんは、「事前の準備の徹底」を痛感。その後の調査では、AI翻訳ツールを駆使して自ら現地の言語の質問票を作成・送付し、状況を大幅に改善させました。予算超過には、社内を粘り強く説得し、その後の無駄な作業を防ぐため発注者と何度も打合せを行い方向性をすり合わせました。最新ツールを即座に取り入れる身軽さに、私自身も既存のやり方を見直す大きなきっかけをもらいました。

また、インドネシアで日本の新しい技術や製品の効

果を確認する「実証事業」に参画したBさんは、段取り通りに進まない現地特有のペースに悩まされました。現地都合で急遽出張が決まり、わずか1.5週間の弾丸渡航で成果を出す必要がありました。

当初は「渡航したのに成果が何も得られない」事態になりかけ、焦ったものの、「一方的に押し付けても成果は出ない」とすぐにマインドを切り替えたそうです。時間がない中で状況を打破するため、会議や雑談を通じて人間関係の構図を把握しつつ、時にはストレートに「この件の意思決定は誰に尋ねたらよいか？」と確認しました。相手の裁量範囲を見極め、円滑に進むように心がけた結果、必要な成果を持ち帰りました。現地のペースを尊重しながら着地点を探る姿勢は、まさに相手の懐に入り込む若手特有の愛嬌とフットワークの賜物だと感じます。

肩書きを超えた等身大のコミュニケーション

過酷な環境から、フラットな関係構築の重要性を学んだ仲間もいます。Cさんは、気候変動による川の増水で頻繁に冠水するジブチの幹線道路上の橋梁建設プロジェクトに参画しました。設計通りに工事が進むかを確認する現場監督を一人で任され、経験不足と日本のコンサルタントが自分だけの孤独感から、体調を崩すほど追い込まれました。

しかしCさんは素直に現場へ足を運んで職人の作業を観察しました。現地の職人との距離を縮めるため、挨拶を英語の「ハロー」から、イスラム教共通の挨拶「アッサラームアライクム（あなたに平和がありますように）」に変えてみたのです。すると、職人たちの表情が目に見えて穏やかになり、それを機に積極的にコミュニケーションを取るようになりました。分からないことは質問したり、不安なことはサポートをお願いしたり、助けてもらったときは全力で感謝を伝えるようにしました。そうして自身の疑問や不安感を少しずつ解消していったそうです。立場や肩書きに縛られない「等身大のコミュニケーション」が周囲を巻き込む力になるのだと、勇気をもらえるエピソードです。

コートジボワールで処分計画を現地政府と立案するプロジェクトに携わるDさんも、現地とのコミュニケーションに工夫を凝らしました。相手の担当者が非常に多忙で打合せ時間が取れない中、隙間時間の突撃対話や粘り強く議論の場を設けることで担当者との協議を捻出しました。さらに相手を日本に招いた



写真3 現地スタッフとの集合写真

研修期間を最大限に活用しました。講義や視察に同行する中で、現地の課題や真のニーズを直接ヒアリングし、食事の席では、家族の話などプライベートな話題も交えて、親睦を深めました。その結果、研修最終日には今後の進め方を協力して整理することができ、その後の現地協議でも今までよりスムーズに話し合いが進みました。

ちなみにDさんからは「想定外に便座がないトイレが多く、無事なトイレを探すのも一苦労でした」という裏話も飛び出しました（筆者も別の国で経験あり）。想定外の環境でも、柔軟に対応し着実に前に進める過程にこそやりがいを感じると語ってくれました。

おわりに

仲間たちのリアルなエピソードから見えてきたのは、日本の常識にとらわれない「アンラーニング」の力と、誰とでもフラットに繋がる等身大の姿勢でした。

私自身も日々の業務の中で、この泥臭い対話の大切さを痛感する一方で、「若手ならではの柔軟な仕事の進め方」を意識しています。SNSやチャットアプリで現地とタイムリーに連絡を取り合っ協議機会を増やし、定期的なやりとりで関係を構築することは、デジタルツールに触れている若手にとっての「最強の武器」です。さらに最近ではAIを活用して知識不足を補い、限られた時間で最大成果を得るなど、変化を恐れず新しい手段を積極的に活用する姿勢が私たちの強みです。

これからも、フットワークと愛嬌を武器に、現地のニーズに寄り添い、日本のインフラ技術と世界を繋ぐ架け橋として同世代の仲間と共に挑戦を続けていきたいと思っています。